

第71回 大阪府青少年読書感想文コンクール

中学校の部 特選

大教大付属天王寺中3年 芝崎陽寧（しばさき・はるね）さん

◇ママレードを頬張って

憧れ、嫉妬、いじめ、恋愛、友情、スクールカースト。同年代の女子の「すべて」が息苦しいほどに詰められた一冊だったと思う。かなり生々しいし、決して爽やかな気分で読み終えられるほどのものではない。そして何より、この物語の中に私という人物が存在していても、何ら違和感もないだろうということが怖い。それほどにリアルで、すごく繊細な物語だった。

私は、一冊の本を読み終わったあと、他の人のレビューを読むことがよくある。それは決まって、その本の結末にあまり納得がいっていない時だ。なんとも自分の意見を持ちにくいという時に、他の人の意見に頼ることが多い。そうして今回も同じようにレビューを読んでいた。すると、こういう意見が多くあった。「読んでいて辛いが、それでも彼女たちがキラキラして見えた。」この本には希代子、奈津子、恭子、早智子、朱理という五人の主人公がいる。彼女らは高校一年生の同じクラスの生徒たちで、この本には彼女らの異なる視点からの物語が描かれている。先ほども述べたように、私は決して綺麗な物語ではなかつたと思う。彼女らに憧れを覚えることはほとんどなかった。しかし、レビューでは「キラキラ」「羨ましい」という意見が多く書かれていたのだ。きっとレビューを書いている多くの人達は、私の年代の一回り、二回り上の人達だと思う。いわゆる、中学生、高校生「だった」人達だ。彼らは、私がこの物語で見た息苦しい世界を「美しいもの」と評価する。記憶は美化されるものだと分かってはいるが、やはり納得できなかった。

そこで私は、大人たちがこの物語で「美しい」と感じるものについて一度考えてみることにした。たしかに、時間が経つにつれて感じる「懐かしい」という気持ちは、それに関連するものを「美しい」と感じさせることがある。実際に、私も何年か前の事柄を懐かしいとも思うし、美しいと感じることもある。でも、原因は決してそれだけではないと思うのだ。時間が経って懐かしく思い、美しく感じる。そんなに単純なものだろうか。レビューを書いている大人たちにもきっと苦しく、辛い思い出があると思う。この本を読んで、私と同じような気持ちを感じたことは確かなのだ。自分を見透かされているような、そんな気持ち。自分の見られたくない部分を擬人化されて、登場人物にされるような、そんな気持ち。しかし、それすらも美しいと感じさせる何かがきっとあるのだ。私にはまだ分からぬ。何なのだろう。

私はその答えを見つけるため、ヒントになりそうな文章を探してみることにした。そして、ある三文を見つけた。「そうだ。甘く煮詰めてしまえばいい。酸味や苦味だって美味しいアクセントに変わらるはずだ。」これは、憂鬱の象徴であった酸っぱい甘夏を、ママレードにしようと思いついた時の奈津子のセリフだ。彼女は学校の校則に違反しながらも、自分自身を変えたいという思いでアルバイトを始めた。その中で彼女は苦しい思いを味わったりもするのだが、その思いを象徴しているのがまさに甘夏である。それを彼女はママレードにしてしまおうと考えた。しかし、この時彼女はその苦味や酸味を砂糖で塗りつぶしてしまおうとは思っていない。苦味や酸味を「美味しさ」に変えようとしているのだ。彼女も新しい自分に変わるのだろう。また、甘夏の苦味や酸味が美味しいアクセントに変わる時、彼女の中の苦しい思い出も、彼女の強みに変わるのだろう。瓶に詰めたママレードの黄金色は、彼女のこれから的人生を明るく

照らしてくれる、そんな気がした。

少しだけ、大人がこの物語を美しいと感じる理由が分かった気がする。大人にとって、学生時代の苦しい思い出（苦味や酸味）も、彼らの人生を彩る材料になっていったのだろう。でも、まだ分からぬことが多い。大人たちは何を「美しい」と感じたのか。それはきっと、今の私にはまだ分からぬし、無理に分かろうとする必要もないのだ。だから私は、大人になった時にもう一度この本を取り、読みたいと思う。大人になった私は、この本を読んでどんな感想をもつんだろう。すごく気になるのだ。十五歳の私をとりまくいろいろな感情は、上手く私のマーマレードのアクセントになってくれているのだろうか。

読み終わり本を閉じた私には、マーマレードの甘みが口いっぱいに広がったような、そんな満ち足りた気持ちになっていてほしいと思う。

（「終点のあの子」柚木麻子／文藝春秋）